

# 幽霊屋敷のアイツ

## 下

川口雅幸 Masayuki Kawaguchi



アルファポリス文庫

この物語はフィクションです。  
実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。  
全て創作であり、  
現実の出来事をモデルにしたものではありません。

## もくじ

### 第 四 章

裸足はだしと白いハイカット 5

### 第 五 章

古井戸の中の明日 89

### エピソード

195

〈上巻もくじ〉

第 一 章 失われた肝だめし

第 二 章 消えたポニーテール

第 三 章 坂下さんの秘密

## 第四章

裸足と白いハイカット

1

……ス ……トーマス——

どこかから、ぼんやりと声が聞こえる。  
と思ったら、白や黄色、ピンクの小さな花々が一面に広がる草原の中に、  
オレはいた。

トーマス——

まただ。今度はだいはつきりと聞こえた。

声のほうを振り返ると、霞がかつた青いボディースーツが、そこにふんわりと立っている。

「ユリカボか……って、これどうなってるの?」

「睡眠中のあなたの脳波に、直接働きかけています」

「スイミン?」

「だいぶお疲れのようでしたので、こういう手段を取りました」

「そっか、寝ちゃったのかオレ。じゃあこれ、夢の中ってこと?」

「簡単に言えばそういうことになります。尚、この交信はシータ波を使用しているため、覚醒時の記憶にもしつかり残りますのでご心配なく」

「よく分かんないけど、こんなこともできちゃうんだ。さすが未来って感じだなあ」

あの後オレは、こっそり公園から立ち去り、あてもなく近所をブラブラして時間を潰した。

結局家に帰り着いたのは、九時過ぎだったかな。とにかく疲れた。

エレナに声をかけなかったのは、雰囲気的に話し掛けづらかったからだ。いや、正確にはちよつと違うか。

何となく、話し掛けてはいけない状況に思えたというか、見なかったことにしたほうが、お互いのためがいいような気がしたんだよな。

それにオレ自身、誰かと話したりするより、独りで考えることに集中したかった、というのほもちろんある。

とは言うものの、あれからずつと頭をフル回転させてるんだけど、さっぱり分らない。

坂下さんとあの『アサミ』が同一人物なら、去年の肝だめしの一件は、夢でなく現実だったと証明される。

でもあれが現実ならば、病院のベッドで目覚める前と後で記憶が食い違うのは、いったいどういうことなんだろう……。

そんなことを布団の上で考えあぐねているうちに、いつの間にか眠りに落ちてしまったらしい。

「ちよつどよかった。ねえユリカボ、あの子とコミュニケーションを図るな

んで、とてもじゃないけどオレには無理だよ」

やつと現れてくれたかと言わんばかりに、次から次へと愚痴が溢れ出た。

「一瞬、現状を報告した後、不可解な『記憶の食い違い』について触れると、間髪を容れず、「分かっています」と返ってくる。

「今日はその件について、現時点で判明している事実をお伝えするために伺いました。それによって、あなたの疑問もほぼ解消されるでしょう」

ユリカポはそう言うのと、「これは今後の調査の進行における、重要な情報でもあります」と前置きしてから話し始めた。

「結論から言いますと、あなた方二人は、こことは別の世界から来た、言わば訪問者という立場なのです」

「別の世界？ それってもしかして……」

「お察しのとおり、ここはあなた方がいた世界とそっくりな並行時空、すなわちパラレルワールドです」

「マジでそうなの!?!」

前に読んだSFマンガに、こういうのがあったんだ。

ごく普通の少年が、ひょんなことから別の世界に迷い込んでしまう物語。

登場人物が話の中で、その世界のことを『パラレルワールド』と、確かにそう呼んでいた。

そこは怪物や魔物がいる異世界とかじゃなく、現実とほとんど区別がつかない、微妙に何かが違うだけの世界だった。

だから、ひょっとしたらオレの場合もそうなんじゃないかって、思わなかったわけでもない。

だけど、

「でもちょっと待って。だとしたら、この世界に元々いるオレって、どこにいったの？ 全然見かけないんだけど」

その点だけが、どうしても腑に落ちなかつたんだ。

マンガの中では、別の世界の自分とすぐに鉢合わせして、お互いに驚く場面が面白おかしく描かれていたのに。

するとユリカポは、

「残念ながら並行時空間において、実質的にそういう現象は起こりえま

せん」

きっぱりとそう言い切った。

「元来、空想上のそれとは仕組みが異なるのです。これについては、とても難しい話になるので、いざ折を見て」

「待って待って、すごく興味あるな。聞かせてよ」

「では、手短かに。普段あなた方が見ている夢というものに例えてご説明しましょう。実はこの世界に来たあなた方は、今まさにその『夢』を見ているのと同じ状態なのです」

「夢？」

「はい。そもそも夢というのは、眠っている間に意識がパラレルワールド間を交錯している状態のことである、と未来では考えられています。ところが今回のように、時空変動などの影響により、睡眠時以外にも意識がそれと同じ状態に陥ってしまうケースが稀まれにあるのです」

「じゃあ、元々この世界にいるオレやあの子は、今どうなってるの？」

「あなた方の意識がここへ飛んできた時点から、この世界のお二人は、あな

た方そのものになっています。つまり、あなた方の行動は、この世界の彼らからすれば、そうですね、やはり夢を見ているような感覚になるでしょう。ですから、例えば彼女の意識が元の世界に戻れば、この世界の彼女は何事もなかったかのように元通りの自分にいる。元の世界に戻った彼女も同様の感覚になるはずですよ。そう、ちょうど夢から覚めたみたいに」

「ん〜。分かったような分かんないような……」

ユリカボの話によれば、オレたちはこのよく似た別の世界に飛ばされた挙句、まるまる一年もの間、この世界の自分に成り代わって生活していたことになる。

だとすれば、身の回りのことが少し違うと感じていたのは、やっぱり記憶障害とかのせいじゃなかったのだ。

それにしても、まさかパラレルワールドなんてものが本当にあるとは。しかも、まさか自分自身がそこに迷い込んでしまうとは。

「ってことは……そうか、分かったぞ。オレの任務って、あの子を元の世界に連れて帰ることじゃない？ そうでしょ」

「いかにも。今回の調査の最終的な目的はそこにあります。ですが、ここで一つ問題が」

「問題って？」

「彼女はあなたと違い、ここへ来た経緯が複雑化していることが分かったのです。そのため、元の世界に戻るのが困難な状態にあります」

「ええと、オレと違うってどういう意味？ 二人ともあの井戸に落ちこちてからこうなったわけだよね。同じじゃん」

「確かに、あなた方が共にこの世界へ来たのは事実です。しかしトーマス、あなたと彼女は同じ世界の住人ではありません」

「……どうということ？」

「パラレルワールドは無数にあるのです。今いるこの時空間と並行する世界は、ほかにもたくさん存在します。仮にあなたのいた元の世界を『A世界』、ここを『B世界』としましょう。彼女はそのどちらでもない、『C世界』の住人なのです」

「ええっ!? じゃあ、去年会った時には既に、あの子はその『C世界』から来てたってこと？」

「そうですね。まず、時空変動によって彼女は元の『C世界』から、あなたがいる『A世界』に飛ばされた。その後、あなたと共に『A世界』から、さらにここ『B世界』へと飛ばされてしまった」

「もしかして、あの井戸に落ちるたびにそうなっちゃうとか？」

「決してそういうわけではありません。しかし、時空変動が発生したことを踏まえれば、あの井戸はパラレルワールド間を結ぶワームホール出現の位置とタイミングが、極めて合致しやすい場所だったと言えるでしょう」

「あのさ、あの子が最初に落ちた時って、その、どういうふうに……何で落ちちゃったのかとか、そういうの、分かる？」

「少々難しい話になりますが、ワームホール内における素粒子の遷移状況から、本人の意思とは関係なく落ちてしまったことが窺えます。最初の落下時には、非常に凄まじい乱時流が観測されました。恐らくそれによって、井戸の中へ吸い込まれてしまったのではないかと」

ふと、あの子の怪訝そうな顔を思い出す。



「彼女は、どうにか元の世界に戻ろうとしていたのでしょうか。そこへ偶然、あなたが通りかかったのです」

そしてオレたちは一緒に、誤って井戸の中へ転落してしまふ。

すると今度は、更に別のパラレルワールドであるこの世界に飛ばされてしまった、ということらしい。

「本当に、自殺しようとしてたわけじゃなかったんだ……」

オレがなぜ『選ばれし者』になったのか、何となく理由が分かったような気がした。

「以上が、現時点で判明している事実です。彼女を無事に元の世界へと送り届けられるよう、こちらも調査を進めますので、引き続きご協力願います。

ほかにも質問があれば、どうぞ」

「じゃあ、もう一つ。今の話からすると、去年会った子と今この世界にいるあの子は、当然同一人物ってことになるよね？」

「ええ、もちろんそうです」

「でもあの子、オレの記憶にある名前と違うんだけど、これはどういう……」

「当局のデータでは、あなたも彼女も、本件において固有名詞への影響は確認されておりませんが」

「おかしいなあ。確かに『アサミ』って呼び名に反応してただけ。本当に『坂下ヒナコ』っていう名前で間違いない？」

「その件について、こちらではこれ以上は分かりかねます。明日にでも、直接本人に確かめてみてはいかがでしょう」

「だから、それができないから苦労してるんじゃない。とにかく、まともに話せる状態じゃないんだから」

思わずため息をつくど、

「承知しました。では、こちらで調整しましょう」

ユリカボはそう言って、チヤロットがやるように左腕をグツと胸の前に構えた。

そしてあの金属製つばいリストバンドの、小さく発光する数字部分をピコ、ピコピコっと何箇所か軽く触れてから、「認証完了」と呟いた。

「それでは明朝、七時二〇分までに彼女宅を訪ねてください」

何か得策を授けられるのではないかと期待していたものの、やっぱり家に足を運ぶしか方法はないらしい。

「くれぐれも時間厳守です。トーマス、あなたの活躍に期待しています。頑張ってください」

翌朝オレは、余裕をもって六時半に家を出た。

ユリカポは、「七時二〇分までに」と言った。早く着く分には問題ないだろう。

いつものように坂の途中から未舗装の横道に入り、少し急な上りカーブを道なりに進んでいく。

徐々に姿を現す、重厚な瓦屋根の家。二階の窓は既にカーテンが開いているようだ。

「よし、今日こそは」

意を決して門をくぐると、いつもはがらんとしている前庭にワインレッド

の小さな車が停まっていた。

車体に映える黄色いナンバープレートを横目に、いつものように玄関の前で深呼吸してからインターホンを押す。

ピン ポーン

すると、そのすぐ後に、「はい」という声が連なって聞こえてくるではないか。

驚いた。ここへ来て、こんなにもあっさりと反応が得られるなんて。これもユリカポの言う『調整』のお蔭なのだろうか。

やがて、曇りガラスの向こうに人影が現れたかと思うと、ガラガラと戸が開いた。

「あらあ、どなた？」

そこには、色白で目鼻立ちのくっきりとした、噂どおりの『かっこいいおばさん』が立っていた。

ピシッと後ろに撫でつけた短めの髪に、キリッと直線的な眉毛と切れ長の大きな目、そして黒シャツ黒ズボン姿。

その凛とした佇まいは、確かに男装した宝塚歌劇団のスターを思わせる、まさしく『ジェンヌさん』だった。

「あの、僕、不二代燈馬つていいいます。坂下さんに、ちよつと用があつて……」

オレが言い終わるか言い終わらないかのうちに、

「あばやっ、珍すごどももあるもんだな」

ジェンヌさんは独特のイントネーションでそう呟くと、いきなり家の中に向かって、「ヒーナー、ヒナッコー！」と叫んだ。

「ふずするくんつておどごのおどもだぢきたよー！」

たぶん、不二代くんという男の子のお友達が来たよと言つてくれたのだろう。

ミノリンとナツコの言うとおり、見た目からは想像もつかない訛りようだ。あつ氣に取られていると、正面にある階段の上から、あのポニーテールが

チラッと顔を覗かせるのが見えた。

が、目が合った途端、すつと隠れたから、

「坂下さん、昨日はごめん！」

オレは咄嗟に叫んだ。

「勘違いしてんだ。本当にごめん！」

今度会ったら謝ろうとか、前もつてそういう心の準備をしてきたわけじゃなかったのに、自然と深く頭が下がった。

改めてあの子の顔を見たら、オレのせいでこうなってしまったんだから何とかしなくちゃって、心底そう思えたんだ。

とにかく許してもらえるまでこうしている覚悟で、暫くぎゅッと目を閉じていたら、

「まんず、あがつてあがつて」

雨上がりに射す陽の光のような声が、やんわりとオレの頭上に降り注いだ。顔を上げると、

「部屋、上だがら、ねまつていつてくれえ」

ジェンヌさんがニコニコしながら階段のほうへ目配せしてくれてる。

「あ、はい。でも……」

恐らくお邪魔することを許可してくれてるんだろうけど、勝手に上がっていったら、あの子をまた怒らせるかもしれない。

どうしようかって、俯いてもじもじしていたら、「おっかねえのが？」って、凛々しい顔が下から覗き込んでくる。

そして、「あえ、めんげ顔して、きかねがらな、ワツハツハ」と豪快に笑うと、

「んでも大丈夫。本当はとってもいい子だから。ほれ、あべさ」

ジェンヌさんにはっこり目を細め、ぼんぼんとやさしくオレの肩に手を置いた。

2

二階の畳部屋に通されると、あの子は勉強机のへりに寄りかかって窓の外を眺めていた。

片側の窓は少し開いていて、セミの声を織り交ぜたそよ風が、ふわり、ふわりと、端に寄ったレースのカーテンを頻りに膨らませている。

オレの寝泊まりしてる座敷より、だいぶ狭いだろっか。

いや、重厚な色をした古めかしい木の本棚やらダンスやらクローゼットやらが四方の壁から張り出しているから、そう感じるだけかもしれない。

ジェンヌさんに促され、オレはダンスを背にしてちょうど部屋の真ん中よ

り少しドア寄りの位置に、恐る恐る正座した。

半ば強引に押しかけたようなものだ。また辛く当たられるのは目に見えて  
いるし、その覚悟はできている。

ところが、ポニーテールはまったくの無反応で、黙り込んだまま振り向く  
気配すらない。

オレの存在を完全に無視する態勢なのか、ジェンヌさんが一旦出て行って  
戻ってくる間も身動き一つせず、まるでこの部屋の時間だけが止まってし  
まったかのようだった。

いい加減、重苦しい空気に押し潰されそうになっているところへ、

「さあさ、大したもんねげど」

ジュースやお菓子の載ったお盆ぼんに笑顔を添えて、再び救いの神が手を差し  
伸べてくれる。

「ほれ遠慮さねで」

「あ、はい、どうも」

そう言えば喉のどがカラカラだ。

手渡されたジュースをいざ口にしたら、ゴクゴクと喉を鳴らして半分くら  
い一気に飲んでしまった。

しかし、一息ついたのも束の間、

「へば、ばあちゃんお仕事すことさ行ぐがら、後あとお願いね」

ジェンヌさんはポニーテールの背中に早口でそう告げると、オレには  
「ゆっくりしてってけれ」と微笑んで、慌ただしく部屋を出ていったではな  
いか。

間もなく、バン！ と車のドアが閉まる音に続き、キヤルルルルブウォ  
ン！ とエンジンが唸る。

砂利じりを踏みしめるタイヤの音が次第に遠ざかっていくのを聞きながら、ふ  
と壁の四角い掛け時計に目をやると、針が七時二五分を回ろうとしていた。

ミーンミンミンミン——……

風と共に入り込んでくるセミの声が、再び部屋に緊迫した静けさをもた

らす。

どうにか家の上がり込むことはできたものの、とても気安く話し掛けられるような雰囲気ではない。

かと言って、いつまでもこうしてお互いに黙りこくっていても、らちが明かない。

オレは残りのジュースをガブガブ飲み干し、その勢いのまま「あのさ」と、思い切って沈黙を打ち破った。

すると、ほぼ同じタイミングで、

「それで」

不意にポニーテールが、窓のほうを向いたまま口を利いた。

「ここへ何しに来たの。私をどうするつもり」

「いや、どうって……」

即座に昨夜の言い合いが頭をよぎり、不安に駆られたのだが、

「あんたいつたい何者？ 私はもう逃げも隠れもしない。なぜこんな目に遭わせるのか、その理由を聞かせて」

毅然とした口調ではあるものの、そこに、もはやとげとげしさは感じられない。  
少しホツとして、

「こんなことになってしまつて、すまないとは思ってる」

「ごめん、と一先ず頭を下げる。」

「けど誤解だよ。きみも勘違いしてる。あれは事故で、わざとやったわけじゃない」

一呼吸おいてから、オレは続けた。

「あの時オレ、てつきりきみが自殺するんじゃないかと思込んで、止めようとしただけなんだ。うそじゃない。だから、まさかこういう事態になるなんて予想もしてなかった。本当だよ。その証拠に、オレも一年前から、たぶんきみと同じ目に遭つてる」

「えっ……」

ポニーテールが微かに揺れた。

「あの日を境に、身の回りでそれまでの記憶と違うことがいくつもあって、

変だなんてずっと思ってた。きみもそうじゃないか。もう気付いてるだろうけど、ここはオレやきみのいた世界とは別の世界だ。要するにオレたちは「パラレルワールドに迷い込んでしまったんだ、と言おうとしたら、

「あんたも元に戻れなくなったの!？」

振り向きざま、坂下さんは目を丸くして、飛び掛かって来るかのような勢いでドカッと、オレの前に座り込んだ。

「ねえ、もう戻れないわけ!?」

血相を変えて、グンと迫り寄ってくるから、

「いや……」

思わず一旦視線を逸らしたら、

「どうしてくれるのよ!」

今にも泣き出しそうな顔で更に詰め寄ってくる。

「どうして私がこんな目に遭わなきゃいけないのよ!」

「落ち着いて。お願いだからオレの話を聞いて」

「もう、何でもこんなことに」

下唇したんぐみを噛んで俯くポニーテールに、「大丈夫だよ」と、努めて明るくオレは言った。

「今日ここに来たのは、きみが元の世界へと帰れるようにするためなんだ。

それがオレの任務だから」

「……なに、それ」

「きみにだけ教える。実はオレ、ある組織の一員で——」

それからオレは、調査隊に任命された経緯を話して聞かせた。

時空統括じくうとうかく管理局かくりきよきょくという秘密の組織があること。その組織から派遣された未  
来人に、突然スカウトされた時のこと。

「チビヤロットっていうんだけど、マンガとか映画に出てきそうな恰好いい女隊員なんだよ。ピッチピチの真っ赤な服で、光る不思議なペンダントや銀色の金属っぽいリストバンドなんか身に着けてて、いかにも未来の人って感じでさ。ん? ああ、確かに怪しいよね。だからオレも初めは疑ってかかった。でも、いきなり分身なんか見せられたら、もう信じるしか……うん、そう、分身。ただでさえビビッてるどころへ、今度はユリカポっていうまった

く同じ顔の女の人がある一人現れるんだもの、腰が抜けちゃうかと思ったよ。うん、マジだよマジ、未来のプログラムだか何だかで自分の分身を助手にできるみたいなんだ。ほんとすごいんだから。どこからともなくパツと現れてはスツと消えちゃうしさ」

話しながら、相手が女子なのに、臆することなく口がよく回っていることに気が付いた。

調査隊として、一刻も早く信用を得ようと必死なのはもちろんだけど。

オレはこの非現実的な話を、分かち合えるであろう誰かに、ずっと聞いてもらいたかったのかもしれない。

「でさ、トウキョクが調査している時空変動っていう現象があるんだけど、どうやらオレたちは、その影響でこの世界へと飛ばされてきたみたいなんだ」

「じゃあ偶然、井戸の中でその現象が起こったってわけ？」

「うん、そういうことらしいよ」

「ふうん……」

最初は訝<sup>いぶか</sup>しがっていた坂下さんも、だんだん顔つきが真剣になってきた。

ユリカボが説明してくれたように、オレのいた世界を『A世界』、ここを『B世界』、坂下さんのいた世界を『C世界』として、更に話を進める。

秘密の組織だとか未来人だとかパラレルワールドだとか、かなり突拍子もない話の連続ではあるけど。

聞く耳を持ってさえくれれば、きっと分かってもらえるはずだという確信がオレにはあつて。

だってこの子は、二度も時空変動を体験し、パラレルワールドの存在をオレ以上に肌で感じているはずだから。

「——というわけなんだ」

一通り説明し終えると、セミの声と小鳥のさえずりとが、一瞬部屋にのどかな静寂をもたらした。

「ちょっとややこしいけど、分かってもらえた、かな」

「うん。だいたいはい」

「そっか、よかった……」



ホツとして、コップに残る融けた氷水を啜ってたら、  
「これ。口つけてないから」

目は伏せたまま、坂下さんが自分の分のコップを差し出してきて、  
遠慮なく口にしたそれは、同じジュースのはずなのに、どこか特別な味が  
した。

それから坂下さんは、窓のほうに向き直ると膝を抱えて、ふうと短いため  
息をついた。

「あれからもう、一年経ったんだよね」

自分自身に問いかけるように、呟く。

「燈馬くん、って言ったっけ。ごめんね私、変に誤解してて」

「いや、いいんだ。そもそもオレの勘違いのせいであんなになっただし」

「ううん、燈馬くんは悪くないよ。それどころか、逆に私のせいで、燈馬く  
んを巻き込んでしまったんじゃないかって、そんな気がしてきた」

意味が分からず、「ん？」って返したら、

「ここ、お母さんの実家なの」

坂下さんは、唐突にそう切り出した。

「私んち、海のすぐ側で……リアス式海岸って、社会で習ってるよね」

「えっと、地図の上のほうのギザギザした」

「それ。私、あの辺に住んでいたの。でも、津波で家が……街が全部、流され  
ちゃって……。去年から、このお家に、お世話になってるんだあ」

窓のほうを眺めたまま、言葉を選ぶように、とつとつと話し始める。

「学校はね、無事だったの。山のほうに建ってるから。それで、地震の後、  
校庭に避難したら、車がどんどん集まってきて、大人の人たちが、『津波  
が来るぞ』って口々に言ってる、でも私、ピンとこなくて——」

暫くして、お母さんの車が校庭に入ってきた。

車を降りるなりお母さんは、「和登とお父さんは？」と慌ただしく携帯電  
話を開き、「全然つながらないのよ」と言った。

お母さんはその日、仕事が休みで隣町へ用足しに出掛けていたのだが、地  
震で慌てて引き返してきたのだという。

国道がかなり渋滞していたため、家に寄るのを断念し、消防団の人たちの

指示に従い、坂下さんのいる小学校へと直行したらしい。

弟の和登くんが通う保育園は市街地にあり、普段は職場の近いお母さんが送り迎えをしていたのだが、その日のお迎えはお父さんが引き受けてくれた。

携帯画面のアンテナを何度も確認しては、「お父さんなら大丈夫だよね」と話しながら、彼らの乗った車の到着を、二人で今か今かと待っていたという。

しかし。

お父さんの車は、それから二週間ほど経ったある日、ガレキと共に変わり果てた姿で発見された。

「お父さんと和登は、行方不明のまま、今もまだ見つかってないの」

ポニーテールの向こうから、涙を啜る音が微かに聞こえてくる。

また、胸がトカトカしてきた。

この前お爺さんから聞いて、津波の話は既に知っているのに。相槌さえも打てず、オレはただ黙って下を向いていた。

「後で聞いた話なんだけど、お父さんは地震直後に、『子供を迎えに行く』って、すぐに会社を飛び出したみたいなの」

だが、その後の足取りが定かでなく、いろんな人たちの話を繋ぎ合わせて推測するに、和登くんを連れて市民会館へ向かったのではないかという。

「最初は、そんなはずないって思ったの。あの地震の前にも、大きい地震が何度かあって、そのたびに、もしも津波警報が出たら真っ直ぐ小学校に避難しようって、あそこなら高台で絶対に安心だからって、お父さんがそう言ったんだもの……。でもね、たぶん、学校まで上がって来る時間がなかったんじゃないかって」

市民会館は緊急避難場所に指定されており、市街地区の人たちは防災訓練の時にも、そこに集まっていた。

実際、地震の後、何百人という数がその会館に避難していたらしく、お父さんたちもその中にいたのかもしれないという。

ところが、その避難場所にまで、あの巨大津波は襲ってきたらしい。

防災マップに「津波はここまでは来ない」と記されていた、本来安全であ

るはずの場所にまでだ。

「信じられなかった。まさかあんなところにまで、それも天井にまで水が上がるなんて……」

湧る音を、ポニーテールは押し殺したようなため息をついた。

「その日は、そんなことになっていいるのも知らないし、何がどうなってるのかも全然分かんなかったけどね」

小学校の体育館には、お爺さんやお婆さん、車椅子のおじさんや赤ちゃんを抱っこしたお姉さんなど、入りきれないほどたくさんの方が押し寄せたという。

幾度も襲ってくる地鳴りと揺れに怯えながら、眠れぬまま夜が明け、

「朝早く、お母さんと、学校の坂の途中まで下りて、街を見にいったの。そして——」

そこから見た光景に、二人とも言葉を失った。

「なんにも、ないの。街が、古代文明の遺跡みたいに、滅びてしまったかのようになってる」

それでいて海は、皮肉にも波一つない穏やかな風だったという。

そして、水浸しの街の、その鏡のような水面には、まるで何事もなかったかのように、美しい朝焼けの空が映っていた。

「もう、この世の終わりなんだって、絶望しかなかった。それでも、『和登とお父さん、二人で探そう』って、お母さんが微笑んでくれたから、私、頑張れたんだと思う」

その日から、電気やガスはおろか水さえもない、『生きるための生活』が始まった、と坂下さんは言った。

近隣に住んでいた、お父さん側の親戚の人たちもことごとく被災しており、もやは地元には身を寄せるところがなかったという。

夜は車の中で寝泊まりする日が、一週間以上も続いたらしい。

「昼間は、毎日お父さんたちを探して……でも見つからなくて。揺れるたびに怖いし、寒いし、この先どうなるかも、全然分かんないし、私もお母さんも、すごく疲れちゃって。それで、周りの人たちの勧めもあって、一度地元から離れてお婆ちゃんちに……このお家に、避難することになっ

## 立ち読みサンプル はここまで

たの

「えっと、ごめん」

ここでついに、オレは口を挟んだ。

「お母さんも、一緒に？」

話を聞きながら、ちょっと疑問に思っていたんだ。

ミノリンやナツコの話だと、確か両親ともいないようなことを言っていたから。

すると坂下さんは、

「そうだよ。お母さんと一緒に来たの。ずっと一緒だった」

そう言って、一度大きく息を吸い込んだかと思うと、「でもここには、お母さんも、いない」と声を震わせた。

「ここはね、私だけ……私一人だけが生き残った世界、だったの」

### 3

パラレルワールド。

現実世界と並行して存在する、現実とそっくりな別の世界。

そんなよく似た世界であっても、それぞれに何かしら食い違う部分があつて。

あつちでの教頭先生がこつちでは校長先生だったり、ローソンがあるはずの場所にファミマがあつたり。

オレも幾度となくそういう事実を目の当たりにしてきたから、それはよく分かっているつもりだ。